



「だいたい美月はさあ、ケンジとどうしたいわけ？」

ケイがポテチをくわえながら美月の顔をのぞき込む。その頃、女子たちもまた、いわゆるガールズトークに花を咲かせていた。

「どうしたいって、どういう意味よ。あいつは私の下僕以上でも以下でもないわ」

「その下僕ってのが微妙なんだよね。美月なりの愛情表現ってやつ？」

「あ、愛情って何よ。なんで私があんな奴に」

そう言いながら、美月はかなり赤くなっている。

「ほらほら、美月ってば正直なんだから。ゆでダコみたいになってるじゃない」

「あ、あんたがあんまり恥ずかしいことを言うから赤面しただけよ」

「ほんとかなあ」

「うるさいわね」

ケイはちよつと意地悪そうな表情で美月の顔をのぞき込む。美月は、いまにも嘔みつきそうな勢いでケイを睨んでいる。

「ところで、マリナって、誰か好きな男はいるの？」

「え、え、なんで私ですか？」

唐突に話を振られたマリナはかなり慌てている。このあたりはケイのお得意だ。美月に火をつけておいて、危なくなると話をはぐらかす。結果として、全面衝突は回避できるのである。しかし、いきなり話を振られたほうは大変だ。

「だってさ、成績学年トップで生徒会役員。でも、美人で気は優しくて天然系。こんなおいしい設定ないからね。いろんな男から告白されたりするんじゃないのかな」

「そんなことないですよ。生徒会が忙しくて、クラスの人たちともあまりお話しできませんから。残念ですが、男子とはご縁がありませんね」

「へえ、そうなんだ。でも、残念、ってことは、ご縁が欲しい・・・んだよね」

「あ、そ、それは、無いよりは、あつたほうが・・・あ、あくまで一般論ですよ」

「それじゃ、あくまで一般論として聞くけど、ケンジみたいなタイプはどうかかな？」

「え、ケ、ケンジ君ですか？」

「そう、中井ケンジはどうかかな？」

「あ、いい人だと思いますよ。リーダーとして頼りがいもありますし」

「そうじゃなくてさ、マリナの恋愛対象かどうかって話なんだけど」

「あの、私はあまりそういうことは考えたことがなくて・・・」

といいながらマリナも真っ赤になっている。

「そういうあんたはどのようなのよ。人にばっかり聞いてないで、自分のことも話したら？」

脇から美月が突っ込みを入れる。

「え、いまさら言うまでもないと思うけど？ はっきり言って欲しい？」

「どうでもいいわ。でも、あいつは私の下僕なんだから、勝手に手を出さないでよね」

「美月さあ、いつまでも下僕一辺倒だと、そのうち逃げられるよ」

「ほつといてよ。逃げるんだったら逃げればいいじゃない。私は別に、あんな奴、なんとも思っていないんだから」

「素直じゃないなあ。まあ、美月らしいんだけどさ」

「でも、ケンジ君は不思議な人ですよ。なんというか、普段はあまり目立たないけど、土壇場ではすごく頼りになるというか。私もこの半年で、ずいぶん見方が変わりました」

「おお、ということ、マリナも参戦する？ ケンジ争奪戦」

「ええ？ そういう意味じゃないですよ」

「うーん、美月はともかく、マリナは強敵かも・・・」

「あのね、勝手に争奪戦にしないでくれる？」

「やっぱ、気になる？」

「ち、違うって言うてるじゃない！」

と言う感じで、なにやら不穏に盛り上がっている。それを冷静に脇から眺めているのがサムなのだが、ケイの無茶振りからは逃れられない。

「そういうえは、サムって、ジョージとはどうなのさ」

「どうということはないけれど、共通の話題は多い」

「うんうん、趣味とか話が合うってのは相性的には重要だよね」

「相性、と言え言えるかもしれない。でも、恋愛を念頭に言ってるのだったら、今のところは無縁」

「えーそうなんだ？ まあ、ジョージの奴も、そっちはからつきみたいだから、無理もないとは思うけどさ」

「ケイ、あんた、どうしてもそっちに話を持って行きたいみたいね」

「当然じゃない。高校生のガールズトークといえは、色恋沙汰って相場が決まってるでしょ」

「まったく、くだらないわね。勝手に色ほけてなさい。私はもう寝るから」

「えー、もう寝ちゃうわけ？付き合ひ悪いなあ」

「付き合ひ悪くて結構よ。おやすみ！」

美月は立ち上がって部屋を出て行くこうとする。

「あ、美月さん、明日はどうします？ とりあえずの動きだけでも決めておきませんか？」

「そんなの、明日起きてから考えればいいじゃない」

「でも、行くところを決めてれば、ケンジ君たちと現地で合流できるし、時間の節約にもなりますから。それに、朝寝坊もできますし」

「朝寝坊できるってのは重要だね。ざっと相談だけしておこうよ」

「それには同意」

「しかたないわね。さっさと決めて寝るわよ」

そんな感じで、女子たちは明日の相談を始めるのだった。そもそも、東京行きは決めたものの、具体的に何をするかは、花火見物を除いてまったく考えていなかったのである。



一方、ケンジ宅のほうはというと・・・

「これをお前にと思ってたな」

と親父が持ってきたのは、銀色のブレスレットである。

「これは？ てか、俺にブレスレットかよ？」

「いや、これはD Iユニットだ。今持っているのに比べるとだいぶアップグレードされてる

んだが」

「俺にこれをつけて歩けってのか？ どう見ても似合わないだろ」

まったく、親父は何を考えてるんだか。だが、こいつはどこかで見たとあるような・・・

「でも、お父さんと母さんは学生の頃、お揃いで使ってたのよ」

「まあ、あれはこれに比べるとだいぶレベルが低い代物だったけどな」

「ってことは、これも親父のお手製か？」

「もちろんそうだが」

「そんな危険なモノ、遠慮するわ」

「おいおい、信用無いな。一応、少ないけど実績はあるんだぞ」

「実績？ いったい誰を実験台に・・・」

そう言いかけて、俺は気がついた。美月が持っているD Iユニットがこれとまったく同じじゃないか。まさかとは思うが・・・

「知りたいか？」

「いや、言わなくていい。想像がついた」

「お揃いも悪くなくろうと思っただけ」

「だから、それが一番困るんだよ。どうして俺が美月とお揃いのブレスレットをしなきゃいかんのだ。てか、美月のD Iも親父が作った代物だったのか？」

「ああ、たしか彼女の13歳の誕生日のプレゼントに、アンリに渡したのが最初さ。いまのは二代目だな。例のシャトル事故の後で、壊れたというので新しいのを贈ったんだ。これと同じバージョンをな。アンリいわく、情報量が一般の人の10倍はあるそうなので、かなり処理能力を上げてみた。まあ、その量子演算ユニットがあればさらに10倍にはできると思うんだが」

「なるほど、確かに美月のD Iユニットが、よく彼女の情報量に耐えてるなど不思議に思ってたんですが、そういうことだったんですね」

ジョージがちよっと身を乗り出し気味に言う。ということは、親父は美月の両親とグルで、彼女を実験台にしていたってことだ。それを美月が知ったら、そのとぼちちは全部俺の所に来るに違いない。考えるだけでちよっと寒気がする。

「それに、プロテクションもかなり強化してるんだ。強力なEMPを食らっても、壊れない

し、オーバーロードのショックも、ほぼ吸収するようになってる。宇宙艇のパイロットにはありがたい機能だと思うけどな。壊れた前のバージョンをヒントに改良したわけだが」

たしかに、最終的に壊れはしたが、美月のDIユニットがなかったら、あの事故は乗り切れなかった。それは認めざるを得ない。

「それは有り難いけど、できれば今の形のままにできないのか？」

「残念だが、ちよつと使えるパーツがもうないんだよ。しかも、パワーエレメントだ。お前のもそろそろ寿命が近いからな。いずれにせよ、遠からず使えなくなるだろうし、ちよつどいいタイミングだと思うんだが」

「あのなあ・・・それじゃ、結局俺はこれを使うしか無いってことじゃないか」

「そういうことだ」

親父はあつさりと言ってくれる。親父が作ったという不安感を除けば、機能的には言うことは無い。唯一俺が一番気になるのが、美月とお揃いということである。まさか、これは親父の密約とか陰謀と言った話ではないのか？あまり考えたくない話だが。

「いいじゃない。パイロット二人がお揃いのブレスレットつてもオシヤレよ」

お袋も適当なことを言ってくれる。

「お父さん、沙依も同じの欲しいな・・・。お兄ちゃんとお揃いがいい！」

また、こいつは話をややこしくする。いや、沙依とお揃いというならまだ美月にも言い訳はできるか・・・

「そうだな。沙依が高校に入ったら入学祝いに作ってやろう」

「えー、高校入るまでダメなの？」

「だいたい、沙依は、まだ進路なんて考えてないでしょ」

「そうだな。これは、将来の進路に合わせた機能を組み込めるから、少なくとも高校に行つてある程度方向が決まった方が作りやすいな」

「こはひとつ・・・」

「でも、沙依は女医さんになりたいんじゃないのか？ とりあえず、メディカル系のサ

ポート機能を入れておけばいいんじゃない？ それに、メディカル系なら、別の方向に進んでも重宝しただけだ」

「さすが、お兄ちゃんっ！ そうだよ。沙依はお医者さんになって、お兄ちゃんが病気になるたら治してあげるんだから」

「うーん、まあ、それもそうだな。スペアパーツはあるから、とりあえず作って見るか」

「もう、あなたは沙依に甘いんだから。じゃあ、一つ条件をつけるわね。次のテストで成績が上がらなかったら、上がるまで没収よ」

「げ・・・お母さん、それはきついです」

「嫌なら・・・」

「あ、頑張ります。だから、お願いします！」

「よし、テスト前にわからないことがあったらお兄ちゃんに聞きなさい！」

「あら、ケンジが沙依の肩を持って珍しいじゃない」

「いやいや、一応、兄ですから・・・」

「お兄ちゃん、沙依嬉しい。大好きっ！」

沙依はそう言う俺に抱きついてくる。これはちょっと・・・。子供だと思っていた妹だが、もう中学2年。すっかり出るところは出ているわけで・・・。俺は不覚にも少し赤面してしまう。でもまあ、これで、美月への言い訳はできる。まあ、気休めに過ぎないことはわかっているのだが、一方的に非難されるのは癪にさわるから、せめて言い訳は用意しておかないと。我がブラコン妹も使いようである。

「ところで、ケンジ。明日はどうするんだ？」

「明日かあ、実は何も考えてないんだけど」

「なんだかケンジらしいわね。でも、せっかく美女4人のお供なんだから、しっかりリードしないとダメでしょ」

「リードなんて、とんでもない。俺が太刀打ちできる連中じゃないことくらい、お袋だってわかるだろ」

「ほんと、誰に似たのかしらね。情けないったら」

お袋はそう言う親父のほうを見る。それを予想していた親父はさっと目をそらす。このあたりはあうんの呼吸ってやつなんだろう。そもそも、俺が誰に似たかなんて愚問だ。きっちり、両方のいいところと悪いところを受け継いで、しかも、時々その両方が俺の頭の中で喧嘩したりするのだから。

「お兄ちゃんは、どっちかと言えばお父さん似かな。沙依はもちろんお母さん似だよね」

「あら、私に似たんだったら、もう少し身の回りのことをきちんとしなさいよね」

「ごめんなさい。自爆でした・・・」

沙依は、ぺろつと舌を出して屈託なく笑う。結局は、二人ともしつかりと両方からあれこれと受け継いでいる。どうせなら、都合の悪いところは先に遺伝子操作で修正しておいてくれればいいと思うのだが、美月に言わせると、そんなことは今の遺伝子工学技術をもってしても出来ないのでそうだ。そもそも、人格や性格の本質的なところはまだ闇の中だというのが彼女の両親の、つまり現役トップレベルの遺伝子工学者の意見らしいのである。

「ねえ、お兄ちゃん。明日はベイエリアへ行こうよ。お店も多いし、アトラクションもいっぱいあるからさ」

「お前が行きたいところへ行つてどうする。明日の行き先は、明日、みんなの意見を聞いてだな・・・」

と、俺が言いかけた時、俺のコミュニケーターに着信があった。マリナである。しかし、これは何というタイミングだろう。しかも・・・

「明日はベイエリアに泳ぎに行こう、つてさ」

「ほらね。沙依はそんな気がしたんだよ」

「で、お前も来るつもりか？」

「うん、つてダメ？」

沙依は、ちよつと困った顔をして上目遣いで俺の目を見る。正直言って俺はこの顔に弱いのである。ついでに言えば、親父はこれをやられるとデレデレになってしまう。間違いなくこれは遺伝だ。この部分はお袋のをもらいたかった気がする。

「ダメだ！・・・と言いたいところだが、明日他の皆に聞いてOKが出たらな」

「わーい。それなら大丈夫だよ。お姉さんたち、優しそうだから。そうだ、明日と言わずに今連絡して聞こうよ。そしたら、明日は現地で待ち合わせ出来るよ」

「お前な・・・ったく」

俺はしぶしぶコミュニケーターでマリナを呼び出した。もちろんマリナが拒否するはずも無く、向こうは全員一致で大歓迎という答えが、すぐに返ってきた。これで、明日も俺はこいつに翻

弄される一日が確定だ。美月とケイだけでも疲れるのに、それに沙依が加わるとどんな騒ぎになるのだろう。そう考えると、ちよつと胃が痛むわけで。

「明日は、ベイエリア中央公園の東口に10時半集合だとさ」

「了解ですっ！楽しみ！」

「ところで沙依、明日の分の宿題はどうするの？」

「お、お母さん、厳しいです。こうなったら、今夜、寝る前にやっちゃうから！」

「本当にこの娘は誰に似たのかしらね。遊ぶとなると気合いが入るんだから」

さて、そんな感じで夜も更けたので、俺とジョージは俺の部屋で枕を並べて寝ることになった。ぼんやりと、明日起きるであろう騒動を想像しつつ、俺はいつしか眠りに落ちていた。